月見（十月）神無月

まだ日本人が芋を主食にしていた時代、旧暦八月の満月の夜に里芋の収穫を祝う祭りをしていました。これに観月の趣向が加わったのが八月十五夜の「お月見」「中秋の名月」です。また、旧暦九月十三日の「十三夜」の月を愛でる風習が加わり、十五夜と十三夜、ふたつの月を観るのが「月見」、一方しか見ないのは「片身月」といって不吉なこととされました。

かっては旧暦の行事を、私たちは新暦の日付でおこない、それほど大きな支障なく過ごしております。ところがどうしても都合の悪いのがお月見です。月の満ち欠けが基本の旧暦では、十五日は必ず満月になります。ところが新暦の八月十五日になると満月でも「中秋の名月」でもなくなるのです。そこで現在は秋たけなわの十月の満月を観るようになりました。

十五夜は十五にちなみ、一寸五合の大きさの団子を十五と、芋類や秋の収穫物、秋の七草などを供しています。ちなみに月から見て左側に作物、右側に団子を配します。植物はススキです。

（村島）